

たまのよこやま

今月の逸品 Returns!! 2025 4

調査員の研究ノート
調査研究員 間直一郎 6

遺跡だより
世田谷区 蛇崩遺跡 8



令和7年度企画展示
「土の中のトーキョー」
深掘り特集

ご飯茶碗、 読んでみた

～埋蔵文化財と私たちの
すき間を埋めるために…～
..... 2



東京都埋蔵文化財センター報

143

「土の中のトーキョー」



深掘り特集

カーテン
コレ何?

その③：ご飯茶碗、読んでみた

～埋蔵文化財と私たちの
すき間を埋めるために～



今から百年近く前、日本民俗学の祖・柳田國男は、次のように述べています。

「陶器の白々とした光が我々の台所風景を明るくしたことは、別に説いてもよい興味ある一つの事件であった。」（『明治大正史世相篇』「米大切」1931年、「陶器」はやきものの意）

これは、“お茶碗の中でホカホカと湯気を立てる白米”という日本人にとっては原風景のようにも思えるビジュアルが実は最近の話であって、しかも近代化を象徴する大きな変化の一つであったという重要な証言です。そもそも、飯を盛るのに“茶”碗と呼ぶこと自体、不思議だと思いませんか。茶を嗜まぬ茶碗の登場が後のことだったとすれば、湯呑(茶呑)茶碗といった重複表現にも合点がいきます。

そして、前掲の文章は以下のように続きます。

「在来の木製の御器と代わってから後も、まだしばらくの間は茶碗は壺形に近かった。ところが朝顔形と称しておいおい平めとなり、さらにその程度も通り越してますます皿形の方へ進んで行こうとしているのは、すなわち飯が次第に盛りやすくなってきた証拠である。」

すなわち、旧来からの糧飯や粥に代わって炊いた白米が普及したことで、ご飯茶碗も壺形から朝顔形・皿形へと変化したとの指摘で、現在の民俗学における見解も、概ねこの内容に沿ったものになっています。

考古資料においても、多量に出土する漆器などにより、近世の特に武家階層にとって木製椀が正式であったことを容易に窺うことができます。

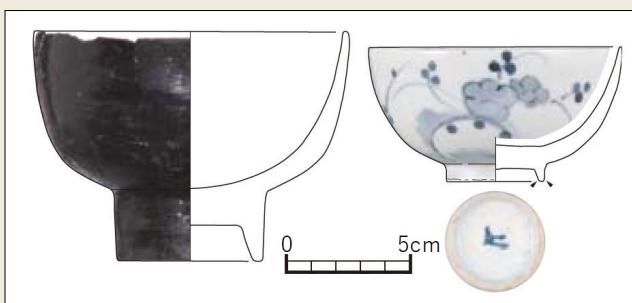


図1 江戸時代前期の漆器飯椀と同中期の磁器食器碗
溜池遺跡[千代田区]

やきものの飯碗も確かに存在しましたが、簡略化された会席料理の場や経済階層の低い人々の代替品など、江戸中期以降に漆器を補完する形で次第に浸透していったとみるべきでしょう。

すなわち、民俗・考古双方の見解は概ね整合していると言えますが、考古学からみると、近代以降の変化にもう少し複雑な過程も見て取れます。今回は、この点を深掘りしてみましょう。

明治維新を挟んだ近代初期(1870~80年代)の出土陶磁器相の大きな変化の一つに、磁器食器碗の急速な普及と新たな碗形態の出現を挙げることができます。筆者がC類と呼ぶ一群で、幕末期の碗と比較して口が広く器高が低い形態で、内面がほぼ白無地になっているのも大きな特徴です。食膳の中心が、木製からやきものへ、壺形から朝顔形・皿形へ、黒(赤)主体から白(青)へと変貌したとなれば、正に大転換ですね。武士から帝の世に移り、また外国の文化も流入しつつあった当時、多くの人々が日々の食器にも時代の薰りを取り込もうとしていたのでしょうか。そして、こうした碗類の出土は、特に都市部で顕著に認められる傾向があります。柳田の説に依るならば、都市域では早くから白米が常食化していたとみることもできるでしょう。



図2 磁器碗C類
左)手描染付(1880年代頃)汐留遺跡[港区]、
右)銅版転写(1900年代頃)道合遺跡／赤羽上ノ台遺跡[北区]

ところが、都会を一步離れると、趣がやや異なります。というのも、江戸時代まで系譜を遡ることができる半球形の碗(B類)(図3・左)が主役を占めていたのです。すなわち、村落域では依然として“壺形”に近い碗が好まれていたことになります。また、B類には内面に文様が入るのも近世からの伝統です。



図3 磁器B類碗と近世期磁器半球碗の比較（伝世資料）
左）型紙印判、右）手描染付

この相違は、都市と村落の間で、人々の生活習慣や意識に大きな差異があったことを意味します。確かに、都市といえば、新たな生業を得て暮らしていた元武家・町民が大きな割合を占めていた一方、農村はというと相変わらず田畠を耕し、山漁村でも前代とほぼ変わらぬ暮らしぶり。漆器から磁器に乗り換える際、彼らが求めたのは新規ではなく、自らが保つ伝統の表現だったと考えれば、この現象にも説明がつきそうです。また、B類には、旧来からの糧飯や粥も食しやすいという実用的な意味もあったはずです。これは、徴兵制等によって村落の人々も都会の文化に接する機会が増えた明治後半（1890～1900年代）頃、村落域でも粗製のC類が一定量出土する点からも傍証されます。

そして、大正の頃（1910年代）、再び大きな画期が訪れます。突如、筆者がD類と呼ぶ碗が現れたのです。内面は白無地ですが、B・C類より器高が高くなっていることで、村落域の伝統的な食スタイルにもフィットしたのでしょう。これらは、都市・村落を問わず、日本本土全体に遍く浸透していきました。都市・村落の文化的融合ともいえる現象です。（ただし、伝世品の箱書きには依然として「茶漬茶碗」などと書かれていたりするのですが…）

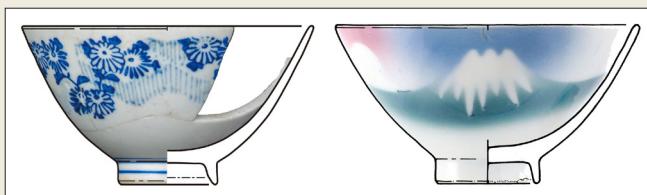


図4 D類碗（いずれも1930～40年代）
左）ゴム印染付 長崎一丁目周辺遺跡[豊島区]、
右）吹絵技法 伝世資料

また、前後して、様々な色彩釉や印刷技法なども導入され、ご飯茶碗は視覚的にも華やかなものになっていました。

ただ、これだけの大きな変化があったにも関わらず、前述の柳田は、この“事件”について全く言及していません。そもそも、『明治大正史世相篇』執筆当時は既にD類主体の段階だったはずなのに、何故「ますます皿形の方へ」と表現したのか。筆者にも今もって理解不能な大きな謎です。

さて、このD類碗は戦後もしばらく用い続けられますが、経済成長著しい1960年代になると、瞬く間に体部が直線的に開くE類に転換し、1970年代半ばには再び浅い皿形を呈するF類に移行していきます。また、この後も1980年代後半、2000年代などに画期を認めることができるなど、ご飯茶碗の流転は今もなお続いているのです。消費量が減少傾向にあるとはいえ、昨今の品不足とそれに伴う価格高騰が殊更に社会問題化しているように、米飯は今も日本の食生活の支柱的存在であり続けています。だからこそ、それを食す器にも、それぞれの時代が映し出されるのでしょうか。ただ、紙面が尽きてしまったので、ここから先の話は機会を改めることにさせてください。

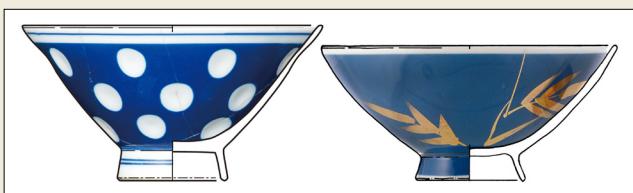


図5 E類（1960年代）・F類碗（1970～80年代）
左）長崎一丁目周辺遺跡[豊島区]、右）伝世資料

柳田國男は、先史時代偏重だった当時の考古学に對し批判的でしたが、『民間伝承論』（1934年）の中では、以下のような願望も示しています。

「広義の歴史の學問を変更させる為に、所謂考古學なるものと民間傳承の學問との連携をさせ、二つの學問の境界を無くして了ひたいと欲している。」

柳田も生きた“近代”という時代が埋蔵文化財の射程に入ろうとしている今、世紀を隔てた彼の期待はようやく叶いつつあると言えるでしょう。

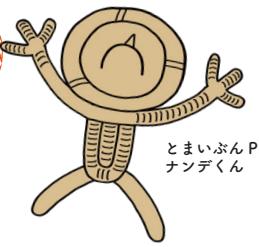
（長佐古 真也）

【引用文献】長佐古真也2007「続・お茶碗考」『考古学が語る日本の近現代』同成社

※ 汐留遺跡は東京都教育委員会、その他は各区教育委員会所蔵資料

今月の逸品

2025年
Returns!!



とまいぶん PR 係
ナンデくん

いっぴん
「今月の逸品」展示では、当館の収蔵品や現在調査中の遺跡の出土品の中から、選りすぐりの逸品を（ほぼ）月替わりで展示しています。ここでは2025年に紹介した「逸品」たちを、いくつか振り返ってみましょう。

Vol.107 「ナンデくんの親戚集合！」

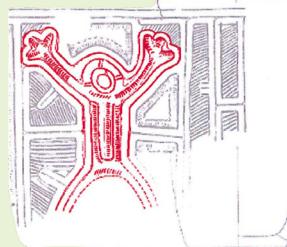
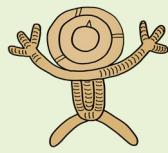
縄文土器 深鉢

（多摩ニュータウン No.72 遺跡、縄文時代中期）

現在は当センターのPR係を勤める「ナンデくん」は、多摩市内の遺跡から出土した土器に描かれていた人体文をモデルとしたキャラクターです。2025年のお正月には、そんなナンデくんの親戚に集まつてもらいました。いずれも八王子市内から出土した「勝坂式」と呼ばれる土器で、ナンデくんに似た人体のような文様がついています。文様や形態などから、左の土器はナンデくんとだいたい同世代のいとこ、あとの2人は約150歳年下のひ孫（？）と考えられるのですが、ナンデかみんなパンザイポーズで、賑やかな年明けとなりました。

参考
ナンデくん土器

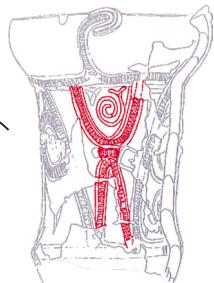
多摩ニュータウン
No.46 遺跡出土
人体文土器

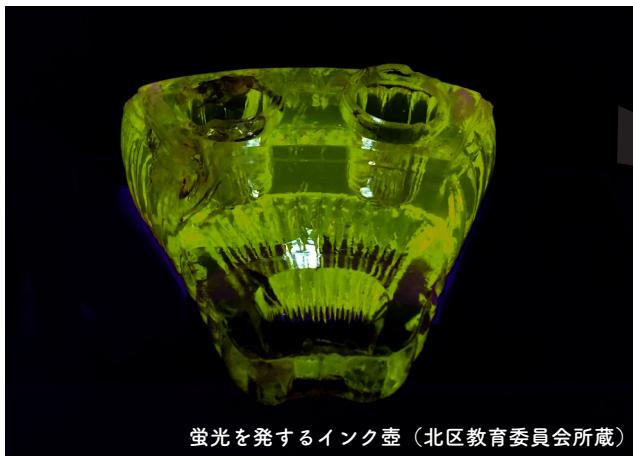


Vol.108 「結界の中枢部、姿を再び…」

賢瓶・輪宝・独鉈（圓福寺跡遺跡、江戸時代前期）

お次は発掘調査中の遺跡からの速報展示。取り上げたのは、現在も出世の階段で有名な愛宕神社のふもとにあった圓福寺という寺の境内（推定）から見つかった銅製品です。中央にある賢瓶の周りを、独鉈（棒状の法具）と輪宝形に切り抜かれた銅板8組が囲んで配置されるという特殊な状態で見つかりました。これらは、密教の地鎮の作法に則って配置された結界の中枢部と考えられます。江戸時代の創建以来、既に廃寺となった今日までこの寺を護るがごとく眠っていた法具の姿はまさに「逸品」でした。





蛍光を発するインク壺（北区教育委員会所蔵）



Vol.109「暁に差し始める微かな光」

蛍光ガラス製インク壺・牛乳瓶
(道合遺跡／赤羽上ノ台遺跡、大正～昭和初期)

3月には、新しく始まった令和7年度企画展示「土の中のトーキョー～近代考古学事始～」にちなみ、近代のガラス製品を取り上げました。19世紀にボヘミア地方（チェコ共和国）で作られ始めた「ワセリンガラス（ウランガラス）」は、暁・薄暮の頃にわずかに蛍光を発することで知られた当時の流行物で、開化によって急速に西洋技術を導入していた日本にも伝わり、明治時代後期から戦前にかけて利用されたとされています。展示では紫外線ライトを当て、黎明期の東京を象徴する淡い光をご覧に入れました。ただしこの展示の後、蛍光ガラスには「ウラン」が添加されていないものもあることが新たに判明。詳しくは、『たまのよこやま』142号掲載の「深掘り特集」をご覧ください！

Vol.112「捨てる神あれば」…

レンガ（川辺堀之内遺跡、近代）

このレンガは、胎土や制作技法の特徴から、明治30年頃に由井村（現八王子市）で操業した「八王子煉瓦製造株式会社」の製品と推定されています。この会社は官営鉄道の延伸工事での需要を見込んで

設立されましたが、その製品はご覧の通り、歪んでひび割れだらけの有様で、鉄道構造物には耐えなかつたらしく、早々に納品契約を取り下げ、数年後には廃業してしまいます。しかしづかなる操業期間にも関わらず、複数の遺跡の発掘調査で、この社のレンガを井戸枠などの構造物に用いた例が見つかっています。同社のレンガは、住民にとっては充分実用に耐え、割安な製品だったかもしれません。例え近代のような新しい時代であっても、遺跡の調査でしか確かめられない人々の営みがあるのですね。

Vol.113「土の中の声なき声」

訓練用手榴弾（模擬弾）（霞ヶ丘町遺跡、近代）

最後にご紹介するのは、80回目の8月15日に公開したこの逸品。見た目も重量もそっくりに作られた手榴弾の模擬弾です。こうした模造品は昭和10年頃から用いられており、実戦さながらの訓練を無辜の学徒に施していました。かつての戦争の記憶は現在急速に失われつつありますが、土の中には生々しい痕跡がまだ数多く眠っています。それらを一つでも多く掬い上げ、語り続けることも、埋蔵文化財に関わる者の責務であると思います。二度と過ちが繰り返されませんように願いを込めて。



今回の逸品紹介はここまでとなります。当館の収蔵庫や各発掘現場には、興味深い遺物がまだまだ眠っています。来年もさまざまな逸品をお目にかけますので、ぜひご期待ください。（宮本　由子）



（日野市教育委員会所蔵）



調査員の研究ノート

こんな研究しています

#9 調査研究員 間 直一郎



当センターの調査研究員が
行っているさまざまな研究を
やさしく紹介するコーナーです。

石器の石材から人の旅路を探る

私は、旧石器時代人が石器の石材をどこで手に入れたのか調べて、当時の人々の行動域について考える、「石器石材研究」をしています。言うなれば、ある石材の産地をスタート地点、その石材で作られた石器が出土した遺跡をゴール地点に見立てて、その2地点を結びつけることで、石材を携えていた人達の旅路を明らかにしよう、という試みです。

石器石材研究では、黒曜石を対象にした研究が有名です。例えば、「旧石器時代人が、海を渡って黒曜石を運んでいた」という話をご存知でしょうか。これは、神津島産の黒曜石が、海を越えた本州の遺跡から見つかったことで明らかになった発見で、石材が旧石器時代人の旅路について、新たな知見をもたらした例と言えます。もちろん黒曜石だけでなく、サヌカイトや珪質頁岩、安山岩など、様々な石材が研究の対象となっています。

これまで注目されてこなかった「玉髓」

数ある石材の中で、私が研究の対象にしているのは「玉髓」と呼ばれる石です。玉髓は白色で透明感のある石で、旧石器時代の石器製作に時々用いられていました。黒曜石のような石器によく使われる石材を主役と表現するなら、玉髓は利用される頻度が比較的低い、脇役と言えます。脇役ゆえに、これまであまり注目されてきませんでしたが、旧石器時代

人の旅路は、主役の石材だけで語るものではありません。私は、彼らの旅路の知られざる一面を、玉髓から明らかにできると考えています。ただ、ほぼ未開拓である玉髓の研究を進めるにあたっては、大きな課題が2つありました。

玉髓と似た石材との見分け方

1つ目の課題は、玉髓と似ている別種の石材の存在です。玉髓には、石英、メノウ、蛋白石などの外見が似ている石材があり、混同しないよう注意する必要があります(図1)。どれも、ガラスの主成分である二酸化珪素の粒が集まって出来るのですが、その集まり方の違いで名称が変わります。それぞれの特徴は以下の通りですが、分かりにくいので、二酸化珪素の粒を「氷」に例えながら紹介します。

①石英：二酸化珪素が集まって、肉眼で見えるくらい大きな結晶になったものです。飲み物に入れるような、塊状の氷と思って下さい。

②玉髓：肉眼では見えないくらい小さな二酸化珪素の結晶が集まったものです。石英を氷の塊とするなら、こちらはかき氷です。

③メノウ：玉髓の一種ですが、色の違う部分が層状に重なって、縞模様を作り出しているものです。いわば、シロップのかかったかき氷です。

④蛋白石：二酸化珪素が結晶にならずに固まった石で、比重が石英・玉髓・メノウより小さい点が特徴です。ソフトクリームのようなイメージです。

石英	玉髓 メノウ	蛋白石
二酸化珪素の大きな結晶		
比重:2.7	比重:2.60~2.64	比重:2.0
二酸化珪素の粒を氷に例えると…		

図1 玉髓と似ている石材

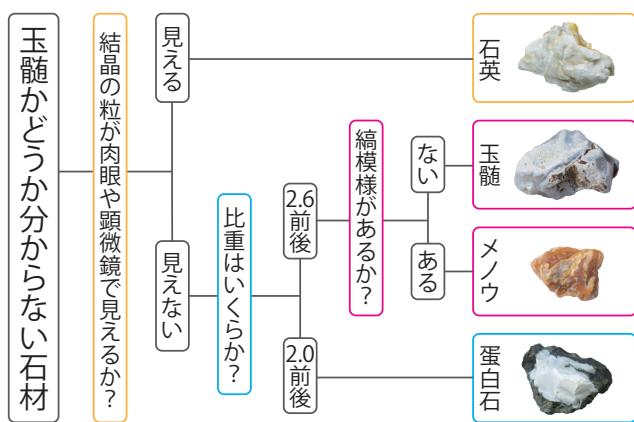


図2 玉髓と似ている石材の見分け方

考古学者は基本的に肉眼で石の種類を判別するのですが、肉眼だけでは先に挙げた特徴の違いを見分けにくいため、それらを混同してしまう場合があります。一方、鉱物学者は石を薄切りにして、偏光顕微鏡で結晶構造を観察するため、高精度で判別できますが、この方法では文化財である石器が壊れてしまいます。そこで私は実体顕微鏡や比重計を使って、各石材の表面的な特徴や比重を複合的に観察し、前ページに掲載したような、フローチャート形式で各石材を判別する方法を考えました（図2）。これによって、石器を壊さずに、ある程度正確に玉髓と似た石材を見分けられるようになりました。

玉髓の産地はどこにある？

2つ目の課題は、玉髓の産地探しです。そもそも玉髓は、どこで手に入るのかよく分かっていないのです。そのため、自分で歩いて山や川に分け入って、拾えるポイントを見つけるしかありません。地質図を使って、玉髓の主成分である二酸化珪素が豊富な場所に見当をつけ、そこを流れる川の河原石を調べます。そうやって玉髓が拾えたポイントを地図にマークしていくと、次第に産地の分布が浮かび上がって来るので（図3）。まだ青森県の限られた範囲しか踏査できていませんが、これまでの調査で、玉髓の産地が比較的限られた範囲に分布している様子が見えてきました。産地が広く分布する石材の場合、人の移動のスタート地点を決めることが難しいため石器石材研究に不向きとされるのですが、その点においては、玉髓は研究に適していると言えそうです。

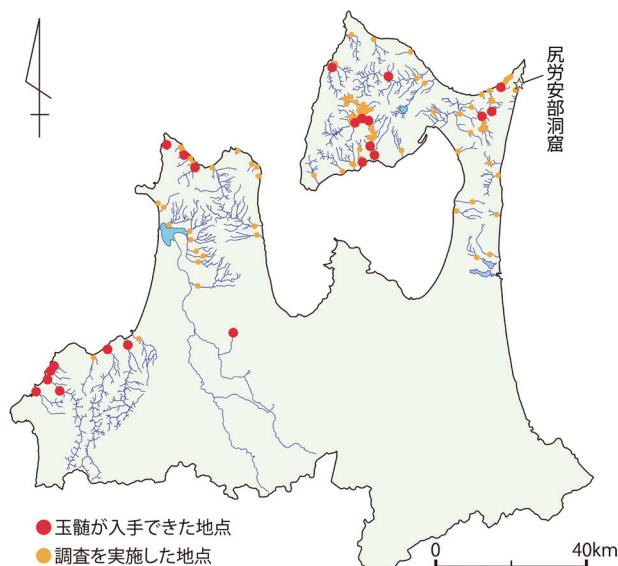


図3 これまでに筆者が歩いて玉髓を入手した地点

私が探し続けている石材

最後になりますが、私の研究のきっかけとなり、今でもその中心にある石器をご紹介します。青森県下北郡東通村の尻労安部洞窟で見つかった、台形石器と呼ばれる旧石器です（写真1）。この洞窟は、当センターOBで、その後大学で教鞭をとられた阿部祥人教授が発掘調査を指揮した遺跡で、2001年から2023年まで尻労安部洞窟発掘調査団による調査が行われていました。先の台形石器は2013年に出土したのですが、その石材の正体が未だ謎のままなのです。玉髓のような外見なのですが、これを鑑定した鉱物学者は、ロシアのバイカル湖周辺で採れる、カショロンという蛋白石の一種である可能性を指摘したのです。当時、洞窟周辺地域では台形石器の石材と似た石は見つかっておらず、そのとき実施された蛍光X線分析でも、石材を構成する元素の組み合わせが、玉髓よりカショロンに近いという結果が出たため、台形石器にカショロンが用いられた可能性には一考の価値があったのです。

しかし、もし指摘の通りならば、石材の一般的な流通範囲を超える、3,000km以上の大移動を経て遺跡に辿り着いた石器となるため、考古学的観点から慎重に検証する必要があるはずです。そこで私は、台形石器の石材が本当に国内で手に入らないのか確かめるべく、洞窟周辺地域の踏査や遺跡出土資料の分析を続けています。これまでの研究でようやく、この石材が国内でも手に入る「玉髓化した堆積岩」という、珪質頁岩などの堆積岩が地中で玉髓に変質した石である可能性が見えてきたため、現在はその産地を調べているところです。

玉髓から人の旅路を明らかにするには、その産地の分布を幅広く把握する必要があるため、今後さらに産地調査の範囲を広げていかなくてはなりません。私の目下の宿題は、件の台形石器に使われた石



材の正体を突き止めることですが、この研究を続けて、いつか玉髓を、黒曜石と並ぶ石器石材研究の代表的な石材にしたいと考えています。

写真1 尻労安部洞窟出土の台形石器
(尻労安部洞窟発掘調査団 2015『青森県下北郡東通村尻労安部洞窟 I』写真2より転載・一部加筆 尻労安部洞窟発掘調査団提供)

*『旧石器研究 17号』(日本旧石器学会 2021年刊行)に本紙に係る研究を掲載しています。

世田谷区 蛇崩遺跡

所在地：世田谷区池尻一丁目
調査期間：2024年10月～
調査面積：約8,000m²

蛇崩遺跡（世田谷区遺跡No.96）は、世田谷区池尻一丁目および下馬一丁目にかけて所在する遺跡です。遺跡は、武蔵野台地南東の目黒台上に位置しています。これまでの4度の調査により、縄文時代中期中葉から後葉（約5,000～4,500年前）の竪穴住居跡が19軒検出されており、縄文時代の大規模な集落跡と考えられています。

今回の発掘調査は、都立青鳥特別支援学校の校舎建築に伴って実施する調査で、蛇崩遺跡の範囲の北側にあたる約8,000m²を調査対象とします。調査範囲全体を5区画に区分して、調査に着手しました。

調査地西端地区では、立川ローム層を掘り込んで構築された縄文時代の竪穴住居跡4軒を含む遺構を検出しました。特にSI020とした竪穴住居跡はローム層を深く掘り込んでおり、良好な状態で残っていました。縄文土器や石器など多数の遺物が出土し、炉や柱穴、埋甕といった住居跡に伴う諸施設も検出できました（写真1）。出土土器の多くは加曾利E1式であり、住居の時期は縄文時代中期後葉と推定されます。



写真1 A区竪穴住居跡(SI020)（東から）



写真3 B区竪穴住居跡(SI067) 遺物出土状況（北西から）

調査地南西地区では、建物基礎の間を調査し、竪穴住居跡に伴う柱穴の跡や埋甕炉、伏甕や土坑など縄文時代中期の遺構・遺物が検出され（写真2）、この地区全体に縄文時代の生活痕跡が残されていたことを明らかにできました。

現在調査中の調査地南東地区では、縄文時代の遺物を多く含む堆積層が比較的良好に残っていました。遺構は、近現代の溝跡1条のほか、縄文時代の竪穴住居跡を多数確認しています。多数の土器や石器が残されている住居跡も見つかっており、出土状況の記録と遺物の取上げを進めているところです（写真3・4）。まだ調査中のため不明な点も多いですが、発掘された土器は縄文時代中期中葉から後葉の勝坂式土器や加曾利E式土器が多く、現在確認している住居跡についてもこの時期に相当すると考えられます。

これまでの調査により調査範囲全体に縄文時代中期の遺構が分布していることが分かりつつあります。今後も蛇崩遺跡の集落の姿を明らかにできるように引き続き調査を進めてまいります。
（佐藤 悠登）



写真2 D区縄文時代中期の伏甕（南から）



写真4 B区竪穴住居跡(SI067) 炉体土器

※今号の表紙：道合遺跡／赤羽上ノ台遺跡・多摩ニュータウンNo.243遺跡・汐留遺跡出土磁器碗（北区教育委員会・東京都教育委員会所蔵）



たまのよこやま 143

東京都埋蔵文化財センター

2025年12月19日発行

〒206-0033 多摩市落合1-14-2 TEL 042-373-5296 <https://www.tomaibun.jp/>

